

2025年度 一般選抜Ⅰ期(1/27) 国語 出題意図

【一般Ⅰ期】

■ 1月27日日程

大問一 出題意図（問題一全体）

問題文は、社会学者による「世間」と「人間」に関する論考である。生物学的な「ヒト」が、家族や地域といった同心円状の「世間」との関わりの中でいかにして社会的な「人間」へと成長していくか、そのプロセスを歴史的背景や「若者組」などの具体例を交えて論じている。「社会人」という言葉の再定義を通じ、自己と他者との関係性を俯瞰的に捉える読解力が求められる。

出題意図（個別問題）

問一：文脈の中で用いられる語句（沙汰、研、代など）の適切な漢字表記能力を問うた。

問二：文脈把握。「社会人」になることの世間的な意味合い（一人前としての承認）を読み取る力を問うた。

問三：空所補充。赤ん坊が最初に触れる「世間」としての親族等の反応（感触や期待）を推測する力を問うた。

問四：文脈把握。古典における「人間（ジンカン）」と「世間」の同義性を理解しているかを問うた。

問五：内容理解。十三参り等の儀礼が意味する「親離れ」や「自立」の節目を読み取る力を問うた。

問六：表現理解。抽象的な概念を「イメージ」として視覚的に捉え直す筆者の表現意図を問うた。

問七：語彙力。「起居をともにする」という表現が、生活全般（寝起き）を指すことを理解しているかを問うた。

問八：記述問題。「世間の風はときとして冷たい」という比喻について、集団内での摩擦や裏切りといった負の側面を経て人間が成長する過程であることを、文脈に即して説明する記述力を求めた。

大問二 出題意図（問題二全体）

問題文は、現代日本における宗教観を、信仰・実践・所属の要素から分析した文章である。日本人が「無宗教」を自認しつつも宗教的实践を行っている現状に対し、西洋的なキリスト教モデルの定義がもたらす認識のズレを指摘している。既存の枠組みに

とられず、日本独自の宗教的感覚を論理的に整理する力を問うた。

出題意図（個別問題）

問一：文脈に適した熟語（充実、脚色、誘致など）を選択する語彙力を問うた。

問二：内容理解。統計データが示す「過半数の日本人に信仰がない」という現状認識を問うた。

問三：論旨把握。宗教の定義が一つに定まらないことに対する筆者の肯定的・受容的な態度（今後も不可能だろうという見通し）を読み取る力を問うた。

問四：空所補充。宗教の定義をめぐる議論が、スポーツの定義論争と同様に「不毛な議論」であることを理解する力を問うた。

問五：接続語句。比喻を用いて結論をまとめる際の「要するに」等の論理展開を示す語句を補う力を問うた。

問六：理由説明。初詣や葬式が「形骸化」と見なされる背景に、信仰を軸とする宗教組織のイメージが存在することを読み取る力を問うた。

問七：理由説明。形骸化していると言われながらも、完全に無意味とは割り切っていない日本人の深層心理や文化的背景を推測する力を問うた。

大問三 出題意図（問題三全体）

日本語の慣用表現や四字熟語に関する知識と、それを適切に運用する力を問う問題である。

出題意図（個別問題）

問一：四字熟語の意味（「針小棒大」「我田引水」など）を正確に理解し、適切な熟語を選択する知識を問うた。

問二：ことわざ（「袖」「無用」「噂」など）の空所を補充し、慣用表現を完成させる教養を問うた。